長谷検校物語
（ながたにけんぎょう）

マンガ制作／崇城大学芸術学部
デザイン学科
助教　木下裕士

発行／長谷幸輝検校研究会

長谷幸輝（ながたにゆきてる）

地歌の演奏家で
不世出の名人と
いわれた人物だ

九州系地歌の
全国への普及

三味線の改良
人材育成など

日本の古典音楽を
今に伝える礎となりました

天保十三年
（1842年）
熊本に生まれる

幼名
半三郎

三歳のころ
天然痘を患い

それが原因で
失明してしまう

芸を人生の伴侶に
という母の薦めで

近所の雪之都の
許へ五歳で入門

手事の名手
と呼ばれる
師の下で

様々な歌と
出会うこととなる

入門当初を
知る人の筆に
よれば

一旦覚えると
忘れることがない
というほど記憶力が
優れていて

これが後の
地歌の普及に
つながっていく

さらには
夏の暑い中の
流汗稽古や

冬の冷水で
冷やした手での
寒稽古などを
通して
その実力を
伸ばしていった

特に演奏中の姿勢が
重要なため訓練として

満水のタライを
頭に乗せたまま
石の上に正座して
三味線を弾いたり

家々の軒先で
門付演奏を行い

その技術を
磨いてゆき
入門から二年で
「輝香」の芸名を
許された

雪之都の死去後
遺言により
須美之都勾当に転門

ここでも実力を
認められ代稽古を
務めるまでになり

十六の頃には免許皆伝し
「美須之都」と改名した

二十三歳の頃 熊本に出張していた
久留米の宮崎勾当に教えを乞い
更に修行を積み

どうだろう
美須之都くん

当道座の
勾当の位に
進んでみないか

との宮崎勾当の奨めで
盲人互助会組織である
当道座に属し

当道座での官位順
検校
▲
勾当
▲
座頭
▲
衆分

上官位である
勾当を受官し
「長谷勾当
幸輝都」
と改名した

のちに幸輝は
勾当受官について

いやァ

あんな嬉しかった
ことはなかタイ！

と語った
という

明治に入り
当道座が解体

当道座による
保護がなくなり

幸輝もまた
長谷幸輝と
名乗るように
なるが

その名声が
衰えることはなく

周囲からは
大検校とまで
呼ばれていた

てれる

なァ

特に力を入れていたのが
地歌三味線の改良で

当時主流だった
京都柳川流のものを
基に改良を加え

のちに弟子たちの手で
九州三味線として
確立・普及している

一方で幸輝は
七十八歳で
死去するまで
ひとつも作曲を
残さなかった

それについては

儂だとて
まだ古典などの
研究も足りず

無闇に作曲は
出せるもの
ではないよ

と語って
いたという

その生涯を
九州系地歌の
普及に捧げた結果

三絃のみならず
箏や尺八にも
影響を与え
三曲合奏が盛んに
なっていった

長谷幸輝によって
広められた数々の
地歌は

大切に受け継がれ
今も発展を続けている

生涯三絃一筋の
幸輝だったが

ぜひもう一度
盲人に生まれて

今度こそ
箏をみっちり
研究してみよう
と思う!!

とも仰って
いたとか…